

「国境を超える言葉」

※まず、教科書に、形式段落①～⑱の数字を書き入れましょう。なお、⑬は「もう一人は死につづけた」としてください。

要約

それぞれの国で、それぞれの言葉によって感じられ名づけられた概念は、国や言葉を異にする者どうしでも共有でき、それが言葉の力である。しかし表現するとき、国境を越えた概念の共有を求めなければ、たやすく過つ。

語句

親和……互いになごやかに親しむこと。
排他……自分(の仲間)以外のものを排斥すること。
憎悪……憎みきらうこと。
感得……感じ取ること。深遠な道理などをさとること。
概念……同類のものに対していただく意味内容。
共生……いっしょに生きてゆくこと。
知る由もない……物事の真相を知るための手がかりや方法が全くないこと。

接続詞、指示語、脚問

ここからは、文章で解説するよ。

授業ができないので、代わりに文章で授業を受けるつもりで読んでほしい。まずは教科書を開こう。段落は書き入れてあるだろうか。それから、一度通読してほしい。時間はかけなくていいよ。この先、ずっと解説をしていくけれど、これだけ読んでもよくわからないと思う。必ず、教科書と解説を行き来しながら読んでほしい。

さて、接続詞の学習について、今更付け加えることはほとんどない。しかし、いわゆる「現代文」で満足に得点できない人は接続詞の学習を中心に行うべきだと思う。文脈をとらえる能力が、読解能力の概ね全てだからだ。

接続詞が読解において重要なのは、どんな文章でも使われ方が変わらないからだ。「しかし」とあれば、前の文章の反対の内容が後に続くことが多い(一部、話題を転換する時にも使う)し、「むしろ」だと、前の文よりも後の文の方が適当だと筆者が判断していることがわかる。「だから」、「したがって」ときたら、前の文が後の文の理由になっているし、反対に、「なぜなら」だと、後の文が前の文の理由になっている。これは、言語の自明性自体を問題とした現代詩以外のジャンルにおいては、どんな時でも変わらない。だから、こうした理解の仕方が最も正確な解答の根拠になる。むしろ、こういう読解なしに解答の根拠を明確にすることはできないんだ。ついでにいえば、たとえ一部読解できない部分があっても大まかな理解ができる。これは、みんな英語や古文でよく経験しているだろう。実は、一番役立つのは現代文においてだ。

日本語の用法は、かなり普遍的な解答の根拠だといえる。これに対し、言葉の意味は文脈で変わる。だから、厳に慎みたいのは、言葉の意味を見て、これは重要と判断してしまうことだ。「愛」とか「自由」が常に重要な意味を持つ言葉とは限らないんだ。

きたか、考えます。自由を見た人はいない。机の上に転がっているものでもない、公園に行けばあるというものでもない。店で買えるものでもない。(心) 私たちは自由という言葉を聞いて、自由という言葉を通して、自由というものを感得し、そう感じられる感覚をそう呼んで、そう名づけて、その言葉を自分のものにしてきました。

「自由」は、日本語の自由という言葉に表され、私たちがその言葉によって感じることのできる感覚を、異なる国々で、違う土地で、今、同じように、それぞれの国の言葉、土地の言葉で、自由と呼び、自由を名づけて、同じに感じている人々がいるだろう、ということだ。

そういう感覚を可能にするのが、国境を越える言葉の力であり、そのようにそれぞれの言葉を通じて、お互いを繋ぐべき大切な概念を共有することが、私は言葉を異にするお互い、

(心) かつて同じ時代に、同じ思いを胸底に秘めて通った二人の詩人がいます。一人は日本の詩人、宮澤賢治です。宮澤賢治の「鳥の北斗七星」という童話は広く知られていますが、それは敵の死骸を葬る鳥の兵士の、星への祈りの言葉で結ばれています。「ああ……」どうか憎むことのできない敵を救さないでいよう早くこの世界がなくなりますように。そのためならば、わたくしの中からだとは、何べん引き裂かれてもかま

目同じ思いとは、具体的にどのような思いや宮澤賢治 ③三頁

もう一人は、宮澤賢治とはほぼ同じ歳月を生き、パリで貧窮のうちに死んだベルギーの詩人、セーサル・パジェッタです。パジェッタに、こういう詩があります。

たまたがいが終わって、
戦士が死んでいた 男がひとりやって来て
言った。——(いけない) 死ぬのは— きみをこんなにも愛してる—
けれどもその屍体は ああ— 死につづけた

パジェッタは宮澤賢治は知らなかったでしょうし、パジェッタもまた宮澤賢治を知らなかったでしょう。二人の詩人は、いずれも二十世紀の二度目の大戦の間に世を去り、いずれも世に知られるのは戦争の後になってですが、(心) 二人の詩人の言葉に導かれて、い

るの、そのときお互い知る由もなかった二人の詩人が国境を越えて共有して、いたと言っている、死者への深い折りと沈黙です。

その言葉によって、感じ、考え、受けとめるほかない言葉があります。そのように言葉ですが言い表せない大事なものを、国境を越えて、私たちはそれぞれの言葉のうちに、お互いに持ち合うことができるということこそ、二人の詩人の言葉は伝えてくれています。

国境を越え、それぞれの違いを越えるのは、言葉(心) 言葉が死す概念です。

②セーサル・パジェッタ (César Vallejo) (1895-1933) ベルギーの詩人、代表作に『悪い使者』『トリル』などがある。

ズームアップ
異文化理解

肝心なことは目に見えない

サンテグジュペリの小説『星の王子さま』で、王子さまと仲良くなった狐が別れるとき、「心で見えないと物事はよく見えない。肝心なことは目に見えない」と言う。文化は水山にたとえられる。国のように、目に見える部分(表層文化)ではなく、海の下に沈んで見えない部分(深層文化)ではなく、海の下に沈んで見えない部分(表層文化)がその大半を占めているのだ。例えば、お辞儀や握手という行動自体は表層文化と言えるが、そのような行動の背後にある価値観や歴史などは深層文化に属する。逆に言えば、人々の行動や言語は、それぞれの深層文化が見える形になったものなのである。ということは、同じ行動に見えても、文化が異なれば、その下にある深層文化は異なり、行動の意味も全く同じわけではない。文化(心) 文化



【書籍紹介】

文化力とは何か、文化の異なる相手と理解しあうためには、語学力だけでなく、相手の文化の「見えない」部分を理解しようとするのが重要なのだ。そう、王子さまが、狐から教えてもらった通り、「肝心なことは目に見えない」のだから。

■異文化間コミュニケーション入門 藤原信俊
「深層」だと感じていることが、異なる文化では「表層」異文化の中で暮らす人々の行動を理解し、円滑なコミュニケーションを行うための人間学。

■はじめて学ぶ異文化コミュニケーション
石井健・久米元・長谷川貴子・橋本信行・石黒真由
副題は「多文化共生と平和構築に向けて」。異文化共生と平和構築のための基盤として、異文化コミュニケーションのエッセンスが凝縮されている。

■文化力の時代 野本浩一
多様なアジアにおいて相互理解をはかり新しい時代を切り拓くために何が必要か。それは、文化(心)と文化(文)の重要性を中心に考察した評論集。



藤原信俊(1953年10月15日生まれ) 異文化間コミュニケーションの専門家。著書『異文化間コミュニケーション入門』(2013年)、『異文化間コミュニケーション』(2015年)などがある。

概念は言葉に似ています。それぞれの言葉という言語によって、私たちにとって大切な概念を、誰に向かって、どう発表するか、何より国境を越えた概念の共有が求められるければ、たやすく通つたろう、そう思うのです。

1 本文をその箇所から四つの段落に分け、それぞれに小見出しをつけてみよう。

2 「それぞれの言葉には、もう一つの言葉があります。」(心) について、次の(1)・(2)にそれぞれ答えてみよう。

(1) もう一つの言葉とは、どのような言葉か。説明してみよう。

(2) そのような言葉に対して、「もう一つの言葉」と言っているのか。説明してみよう。

筆者は、「言葉が「国境を越える」とは、どういうことだと考えているか。説明してみよう。

1 外国人の言葉や外国作品の中から心に響く表現を選び、それが表す「概念」とともに紹介してみよう。

2 「心の中よりほか、どこにもないものについて書く」と、言葉は、詩書でどのように説明されているだろうか。次の(1)・(2)についてそれぞれ調べて発表してみよう。

(1) 社会 (2) 4

(2) 自由 (3) 9

ては、本文を見てもらう。

P8.13 〈けれども〉

さまざまなもの国を越えて移動する。〈けれども〉言葉は、どうか。

という文脈である。つまり、〈けれども〉の後は、言葉は国境を越えないという文意なわけだね。

余談だが、ここでついでに注目しておいてほしいのは、「モノも人も」と、「言葉は」という助詞の使い方だ。こうした助詞を副助詞といい、他の文脈に依存するということを表して、評論文ではしばしばこれをヒントに文脈を把握する必要がある。(たとえば)、「犬も好きだ」という場合と「犬は好きだ」という場合、「猫が好きなのはどちらか」という問に対して、論理的に解答の根拠を示すことができるんだよ。書いていないことまで読めちゃうというわけだね。

ここでは、この「は」の効果もあって、〈けれども〉の前後で、全く反対のことが述べられているんだろうな、と予測がたつね。

それと、きわめて重要なことをもう一つ。当たり前のように見えるだろうが、一般的に言って「評論文では(と)いうか普通の文章であれば)、二つのことが並んだ場合、後のことが筆者の主張であり、重要な内容だ」ということだ。「私は犬は好きで、猫は嫌いだ。」という場合、多くの場合「猫が嫌いだ」ということが趣旨である。これを頭の片隅において、次に行こう。

は……他の文から区別

も……他の文と同様

P8.14 〈それだけに〉

言葉は人の生活に深く結びついている。〈それだけに〉AになれなくなるほどBのも、言葉です。Aと同時にBのです。

さて、ここは気合を入れて読んでほしい。〈それだけに〉がどういう場合に用いられる言葉かという点、「そうだからいっそう」くらいの意味だろう。ここでポイントになるのは、〈それだけに〉を挟むことによって、文脈が少々変更されるということだ。ちょっと次の例で考えてみよう。

順接(前が後の理由)

雨が降る。「だから」、体育大会は「中止になる」。

逆接

雨が降る。〈しかし〉、体育大会は「実施される」。

〈それだけに〉

雨が降る。〈それだけに〉、体育大会は「？」

「」にはどんな言葉が入るだろうか。一般的には、「急ぎ実施しなければならぬ」とか、「競技を厳選すべきだ」などが入るのが自然だと思ふ。ここで重要なのは、どちらかといえば、体育大会は実施される文脈になるということだ。つまり、〈それだけに〉の後には(逆接とは言い難いが)、反対に近い文脈の文が続くことになる。

ここでは、さらにいくつかの要素が関係してくる。ここでは文意をAとかBと表現しているが、本文では、Aは「日常を親しく結び合わせる」深く結び合わせる「であり、Bは「限界を背負わせる」というような内容であることを見るのは難しくと思う。ちょっと整理しながら本文を見ておいてね。

「限界」という語が何を指しているのかはよくわからない。くれぐれも強調し

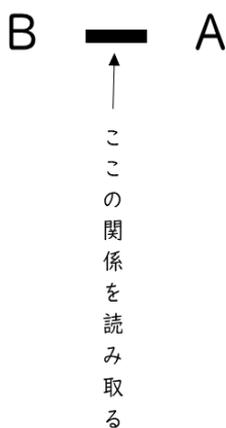
ておきたいのは、言葉の意味で考えてはいけない！ということだ。いや、いけないというか、それだけでは論理的な思考はできないといった方が正しいかもしれない。

ここで論理的に考える手がかりは、「AになればなるほどB」や「Aと同時にB」という語だ。「限界」というキーワードをこねくり回して考えるよりも先に、こういったいつでも用法が変わらない語に着目しなければならぬ。

この場合、それぞれ意味が同じとはいえないにせよ、どちらとも「AとBは（どちらかといえば）背反する」という用法であることを確認しておいてほしい。

さて、先に述べた「後が重要な法則」に従えば、筆者の主張は、「B」になるわけだが、これは「限界を背負わせる」なる若干意味不明の表現。

だから、ここではBは「Aに親しく結びつく」の反対、つまり、「言葉とうまいこと結びつかん」といっているんだなあ、くらいの理解でよろしい。比喩的な表現というか、筆者独特の表現は、後で、具体例を伴って言い換えされることが大半だから、そのうちわかると思っておこう。標語的には「意味不明な表現は具体例を待て！」ということになるかな。



PS「8」にもかかわらず

言葉は親しくさせる。へにもかかわらず、言葉は、共有しない人をはじく。

これも「逆接」の接続詞だ。①段落、②段落の内容と同じく、③段落も

A（一般論）＋「逆接」＋B（主張）

の構造だね。③段落のAは、「言葉は親しくさせる」という表現だが、これは

②段落のA「お互いの日常を親しく固く」とほぼ等しいことは明白だ。したがって、先ほどやや意味をつかみかねた「言葉の限界」は、「言葉は（共有しない人）をはじく」と言い換えられていることに気が付くだろう。「はじく」も少々意味が厳密ではない表現だが、まあ、理解できる範疇かと思う。わからなかったら、「親しい」の反対ということだね。

ともかく、「限界」↓「はじく」の言い換えのように、同じような構造を持った文章が並ぶ場合、同じ事がらを繰り返し語っていることが多いんだ。これは、たとえば傍線部を説明せよといった問題を解く場合に、きわめて重要なことだから覚えておくように。

もう一つ重要なことを付け加えておく。同一の段落内において、接続詞がない場合にはないの意、味がある、ということだ。

ちよつと何言っているかわからないと思うけど、ここに注目してほしい。

「10」(a)人をはじくものもありません。(b)際立って親和的にもなれば、際立って排他的になるのも、言葉です。」

この二文はどのようなつながりだろうか。実は、文脈はほぼ変わらないんだ。同じことを繰り返しているだけともいえる。全ての文章でそうだというわけではないが、文脈を大きく変化させる場合には、接続詞を用いることが多いの

は確かだ。特に、各文の語尾が同じ場合、違う文脈の文をつなげると、不自然になるのは日本語の特徴だ。ちょっとやってみよう。

「雨が降った。体育大会は決行された。私は犬が好きだ。」

かなり詩的な表現になることに気づいてもらえるだろう。

「雨が降った。しかし、体育大会は決行された。ところで、私は犬が好きだ。」

まあ、どうかしている文章なのは変わらないが、だいぶ論理的な文章になったと思う。これが論理的な散文ということだ。

多くの筆者が自覚的とは限らないが、教科書会社の人や入試問題の出題者はそのことを経験的に知っているので、こうした傾向から外れる文章を基本的に素材にしないんだと思う。

話はだいぶん逸れたが、ともかく、

言葉の親しさ||親和的／言葉の限界||排他的

という構図は得られたね。

脚問一は、こういった要素を前提に解答しよう。ちなみに、記述式の場合は、本文抜き出しの組み合わせ、選択肢の場合は、より発展的な理解を要する解答になることが多いよ。

脚問一「言葉の限界」とは、どういうことか。

A 記述では、「言葉を共有できない場合、人は排他的になるということ」。

選択式の場合「人と人は、言葉を完全に共有することはできず、伝えられない部分があるということ」あたりの選択肢を選ぶ必要があるかもしれない。

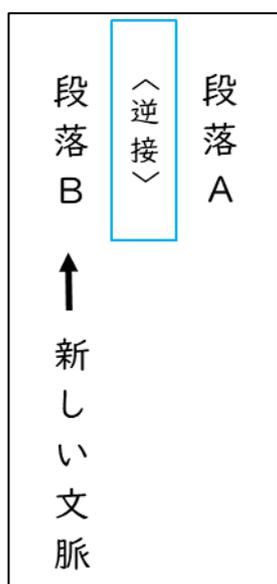
Pg.11へけれどもく

①〜③段落。

④段落(言葉には、もう一つの言葉がある)。

段落の冒頭に逆接が置かれる場合、まずは、その直前の段落と反対の文脈が続くと考えよう。ここでは、①〜③は繰り返しだということを確認したばかりなので、ここから文脈ががらっと変わって、いよいよ本題に入ると考えていいだろう。

ここまでも、「言葉」というものの性質を二つの観点から見ただけで、これまでの文脈はひとまず置いて、「これまで扱っていた言葉の議論」とは違う議論が始まるということだよ。簡単にいうと、「一般的な意味での言葉」とは別に、「もう一つの言葉」があるということだ。



二文目(「在り方も」)、三文目(「ないもの」)はそれぞれ何の接続詞もないので、文脈は変わらず、段階的に説明が展開されていると考えてよい。つまり、「もう一つの言葉」なるものは、「ないもの、ここにはないもの」についていう言葉ということだね。

Pg.14 (たとえば)

④段落の説明。

(たとえば)、社会。世界。)

ところで、先ほどの④段落の説明で理解できただろうか。わからないよね。「ないもの、誰も見たことがないもの、見えないもの」についての言葉といわれても、何いってんだ、と思うだろう。

そういう場合に、(たとえば)という語を用いて説明するわけだ。先にもちよつと触れたが、こういうのを「具体例」という。「意味不明な表現は具体例を待て！」ということだ。

で、ぜひとも覚えておいてほしいのは、評論文というのは、抽象的説明↓具体例↓抽象↓具体と、常に、抽象↓具体を行き来しているということだ。この理解は超重要。

普通、抽象的説明だけ読んでも主張はわからない。だから、ここでさじを投げるんじゃないかって、きつとわかりやすい説明があるはずッ！と辛抱して読むことが大事なんだ。すると、だいたい直後に具体例での説明がある。ここでは、(たとえば)という明確な印があるから迷うことはないが、往々にして(たとえば)とは書かれず、具体的説明が始まっている。これについては、妙に具体的⇨個別的な事がらを扱っているナ、と気づけば、前の文との関係を考えて判断できる。

抽象↓具体の観点だけでちょっと読んでみよう。

⑥段落「そのように」。は、再びやや抽象的な説明。「自由。友情。……。」は具体。「そういった言葉は」は抽象。

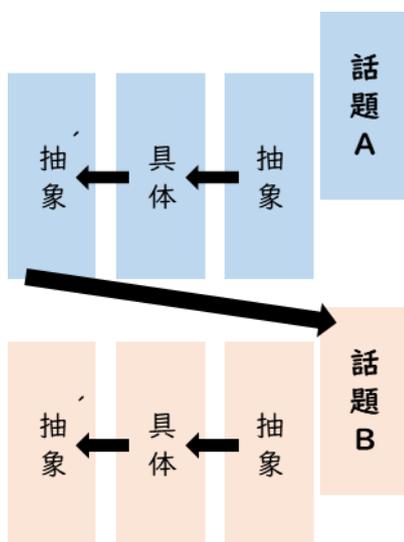
⑦段落はどうだろうか。「国境を越える言葉、あるいは」は、議論が發展している部分だね。内容は後から説明するとして、この段落は丸々抽象的だ。

これを受けて、⑧段落では「自由」という語を扱っているわけだけど、「自由」

という語は⑥段落の具体例を列挙した中であつたものを例として扱っているんだから、具体例なわけ。

⑨段落でも具体的説明が続いて、⑩段落で「そういう確信」とうけるだろう。こういった指示語が、具体例を回収して、抽象的説明を行う合図なんだ。これだけだとちょっとわかりにくいと思うけど、評論の大半はこういう構造で進行するもんだから、この抽象↓具体については意識して読み取る習慣を付けよう。

ついでに言うと、「自由」とか「社会」、「友情」などといった語は、それ自体が重要なテーマになつていてもおかしくないね。一般的にいえば、分かりやすくキーワードなわけだ。でも、この評論においてはきわめて軽い扱いでしかない。繰り返しになるけれど、言葉の意味に着目しすぎると、こういった語を過剰に重視してしまい、読解がおかしなことになりかねないんだよ。



P9.L11 実は

「ささ考へるべし、言葉はは……だ。」

場合によっては接続詞とは言わないかもしれないが、これにも触れておこう。

「実は」の後は、筆者の主張だ。まあ、それはそうだろう。みんな納得するだろうけど、ついでに一緒に次のことも覚えておいてね。語尾についてだ。「〜である」

や「〜のだ」で終わっている文は、筆者が主張している、あるいは前の文の根拠を述べていることが多いんだけど、「〜と思う」も同じく断定の表現だ。間違っても筆者が感想を述べているんじゃないよ。もちろんやや婉曲的なわけだけど、これを考慮して考える必要はない。

ここでは、

国境を越える言葉≠ないものについて言う言葉(「自由」など)

ということを主張しているわけ。①〜③段落と合わせて考えると、

言葉は国境を越えない。

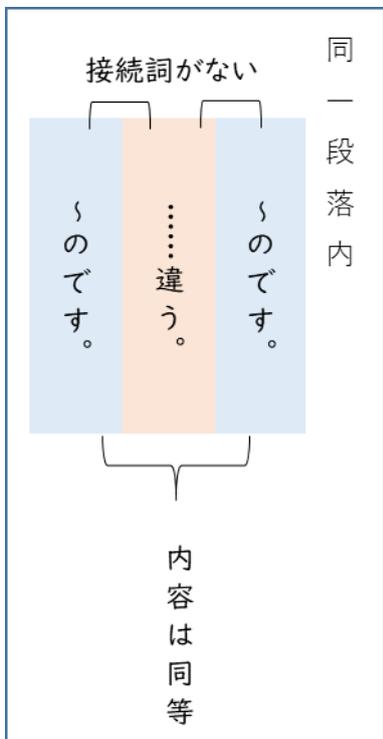
へけれどもく言葉には別の言葉がある(国境を越える言葉がある)
べつにもないものについて言う言葉は国境を越える

ということだ。というわけで、筆者の主張はここまでで概ね取り出すことができたね。

この段落で難しい要素があるとしたら、最後の一文(「ないもの、見えないもの」)な中の、「その言葉でしか感得できないものを、国と言葉を異にするお互いの間でどんなふうに持ち合えるか」だと思うけど、これなんかは表現が難しいだけだ。ここでは語尾に注目してほしい。すると、この段落は、

「(a)国境を越える〜思うのです。(b)国境を越える〜とは違う。(c)ないもの、見えないもの〜思うのです。」

となっているだろう。この構造の文章で、全く違う内容を述べるとか、議論を大幅に進行させることは、まあ普通は無理なんだ。だから、(b)は(a)の補足説明に過ぎないし、(c)は(a)の言い換えに過ぎない。



まだ何言っているかわからない？ よろしい、次の段落を見よう。具体的な説明が書いてあるね。これはありがたい。

抽象的な説明を投げて、読者をつう？？の状態にして、すかさず具体例で理解できるように書いてあるわけだね。

P10.L2 くしかし
自由は見えない。へしかしく、私たちは自由という言葉を知っている。

この段落単体で見ると、非常にわかりやすい説明になっているのではないだろうか。

この段落では、まず「自由という言葉がどこからきたか考える」とやや唐突なことを言い出すわけだが、これに大した意味はない。

重要なのは、「自由を見た人はいない。……」と、誰もが100%同意する前提を述べた後に、「へしかし」と受け、その後、「私たちは……」と筆者の主張部分を置いているということだ。誰もが100%同意する内容、すなわち情報としては何の価値もないことをさらに書くのは、それを打ち消すことで主張部分を読者に強く伝える構造だといえるね。

一般論＋逆接＋主張

のパターンだ。

ともかく、この⑧段落で「自由」などの言葉の性質を概ね理解できるようになっている。

P.O.L.S. やつ
 ⑧段落。
 ⑨段落(他の言葉でも同じことが起きている)

「そして」は、添加の意味の接続詞という。前の文に付け加えて、文脈がほぼ変わらない文が続くということなんだけど、あえていえば、ほとんど意味がない接続詞とっていい。だってそうだろう。接続詞を使わない文の連続は、文脈がほぼ変わらないという意味があるんだ、と何ページか前に述べたね。あってもなくても、文意という意味ではほとんど変わらない。

よく、空欄補充の問題で、接続詞を選択させる問題があるんだけど、「そして」を選ばないといけないケースは、実際かなり稀なんだ。こういう問題を考えるには、他の選択肢を慎重に検討して、他に入るものがない場合に限って、「そして」を選択するべきだね。

さて、ここでは⑧段落に加えて⑨段落ということなんだけど、つまりはこう

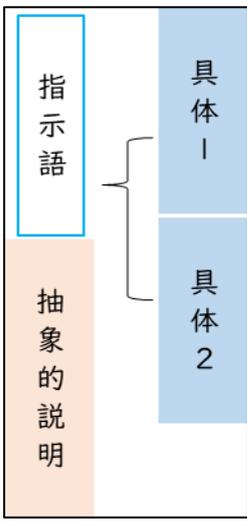
いうことだね。

⑧「自由」などの抽象的な語は、実際に存在はしないが、私たちは知っている。

⑨他言語でも同じことが起きている。

別にどうということはないよね。⑩段落もそのまま読んでしまおう。

冒頭に「そういう確信」とある。先に述べた通り、段落冒頭の指示語は、具体を抽象に回収する機能がある。ここでいう「確信」というのは他の言語の使用者も、日本語の使用者でいう「自由」に相当する感覚を持っているだろうということだ。



さて、ここで「国境を越える言葉」ないものについて言う言葉」を端的に言い換えた言葉が出た。「概念」という語だ。

実は、ここまでの説明で「概念」という言葉を用いないようにするには、かなりの努力を要した。たとえば、みんなは「愛」とか「青春」を説明せよといわれたら大層難儀することに気づくだろう。こういった性質の言葉にはさまざまな意味が含まれているよね。だから、一言では説明できない。いくら言葉を費やしても、全てを説明することは難しいはずだ。時代によって、地域によって相違もある。

でも、通じるよね。難しいことはさておき、まあ通じる。どうして？ 君たちは概念を共有できているからだろう。

この一事を見ても、何かを説明する場合、「概念」が共有できていると、きわめて簡単に、正確に伝達できるんだ。

みんなも「概念」という言葉を知っているね。辞書的には「同類のものに対していただく意味内容。」ということになるんだが、本文に照らしていると、「心の中よりほか、どこにもないものについて言うことのできる言葉」ということになるだろう。その他、いろいろと意味が積み重なっているのはいうまでもない。こういうのは一々言ってられないよね。「概念」という一語は、一々言ってられない意味を一言で言うための、いろいろな意味合いが複合した言葉といっている。

「自由」と一言で言っても、いろいろな意味がある。もちろん、文脈において意味合いは異なるへが、我々は「自由」という、物質としては存在しないものを知っている。これが「概念」ということだ。いうまでもなく「社会」や「友情」もそうだ。「概念」という語自体も典型的な「概念」だよな。

で、諸言語は色々違いはあるけど、概念は共有できる、と。そういう態度が国際的な共生なんだ、筆者はそういうことをいっているわけだね。

脚問2 「心の中よりほか、どこにもないもの」を一般的に表す本文中の語を答えよ。

A 概念

これは間違えてはいけないね。「概念」以外の解答はありえないよ。

いずれにせよ、この「概念」という語を、「言葉」と対比的にとらえることで、

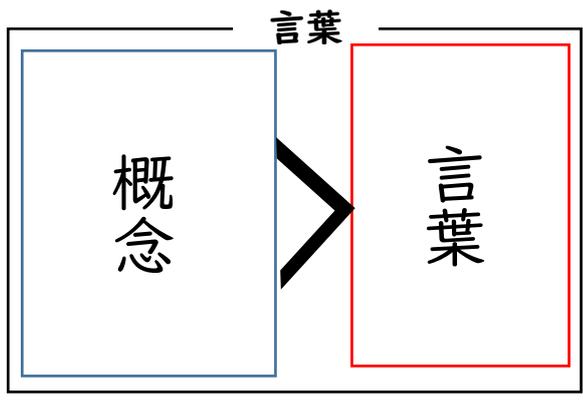
ここまでの議論をかなり明確に理解することができるだろう。

言葉は、共有できない部分がある(1)~(3)

これに対し、概念は共有できる(4)~(9)

概念の共有が共生につながる(10)

筆者は、「言葉」ではなく、「概念」を重視しているようだね。



評論文の多くは、こうしたちよつとだけ違いのある概念を対立させて、その一方を批判的に、もう一方を重視して取り扱い、主張を深めていくんだ。

さて、ここからしばらく本文とは直接関係がない解説をする。本文の内容で精いっぱいの人とはしてもらって構わないよ。ただ、本文のような「ことは論」では普遍的な考え方なので、大学受験する人は知っておいた方がいいね。

というのも、本文では「言葉」と「概念」を区別しているわけだけど、その区別は本来できないんだ、ということだ。

もちろん、筆者は議論を単純化するために、言葉／もう一つの言葉＝概念と分割しているんだと思うけど、一般的に言って、「言語は概念である」という主題の下で書かれる評論文の方が圧倒的に多い。つまり、「言語がないと概念もない」ということだ。

表面的に言えば本論の趣旨に反するんだけど、別に本文の内容を批判したいわけではないからね。本論で言われていることの重点は、こうだろう。

日本人が(大切なこととして)持っている概念と、同じような概念を他の国の人も持っている(ことが多い)。同じようなことを大切に思っているのなら、共生が可能だ、と。

でも、一方で、言葉が違うなら指し示す内容も、大なり小なり違うだろうという立場をとることもできるよね。どちらかといえば、「ことば」を扱った評論では、こちらの主張の方が一般的だから、わざわざ説明しているんだよ。

こうした主張は分かりにくいと思うので、具体例で説明しよう。

英語圏にひじきは存在しない。

いや、存在はするんだが、存在しないも同様だ。英語圏の人は、海藻学者でなければ通常ひじきを認識しないらしい。なぜか。答えは明白だ。ひじきに相当する語がないからだ。食わんしな。

反対に、日本人は hot と cop を区別しない、といえは英語圏の人は驚く。

帽子だよな。

ハットはつば付き帽、キャップはつばなし帽を指すが一部つばのあるものを含む。なんだそりゃ。一言でいえばそんな日本語はないんだね。理解できている人は、ハットとキャップという語で理解しているんだろう。

簡単にいえば、言葉はどれだけ具体的にあれ、全て概念である。わかるだろうか。もう一つ例を出そう。

仮に、イヌとオオカミを区別しない言語があったとする。まあ、そうだな、どっちもポンポンと呼んでいるとしよう。その言語においては、イヌもオオカミも存在しない。そんな概念がないんだ。ポンポンがいるだけである。

日本で開業した外国人シェフは苦労するかもしれない。Lamb(羊の肉)を買おうとけといたのに、現地の従業員が Mutton(羊の肉)を買っているかもしれないからだ。ヒヨコを注文したらニワトリがくるようなもんだ。日本語には Lamb(ラム)も Mutton(マトン)も存在しない。羊の肉があるだけである。

さあどうでしょう。ちょっと抽象化してみるよ。

事物を名指したものが言語ではなく、言語が事物を他の物から区別し、実存ならしめるのだ、と。

言語というのは、その言語で思考する者の概念そのものである。だから、「自由」という語の存在しない語の使用者、つまり日本語以外の全ての外国語のネイティブにとって、「自由」は存在しない。Freedom や Liberty が存在するばかりである。これらは別物だといってよい。まあ、福沢諭吉が Liberty の訳語として、「自由」を使用したんだがな。

しかし、しつこいようだが、別に本文を批判しているわけではないよ。というか、私は個人的には本文の主張には概ね賛同できる。

筆者の言うことは、いつてみればこういことだと思っ。

「お疲れ様です」に相当する言葉は、英語にはない。だから、日本人はアメリ

カ人よりも他人を思いやる傾向がある。日本語は日常的に相手のことを思いやる美しい言葉なのだ。

ってそんなわけないだろう！というわけだ。

誰でも母国語に対しては、一歩間違えれば、「美しい〇〇語」的なことをいいがちなんだと思うが、そんなのは控えめにいつて大間違いだ。ある特定の言語において、ある分野の言葉が豊富だからといって、感性が繊細かどうかなんてわからない。わかるのは海藻を食う習慣があるかどうかくらいなんだ。それは、ただの違いである。優劣の問題ではないんだ。

相手をいたわる言葉くらい、英語にもあるだろう。よく知らんけど、Take care.としようか。これが変なら変で別にいい。そんな言葉つかいはしないですねー、といわれても別にいいんだ。相手を気遣う気持ちは、言語の表層的な相違に聞わない、ということが大事なの。これがHow are you doing? に変わっても、how was your day? でもまあいいじゃん。大事なのは、あんたのことを大事に思っているよ、というメッセージでしょ。これが「国境を越える」ということだよ、たぶん。

というわけで、話は本文に戻ってきた。

①②③までは特に解説することもない。宮澤賢治とセーサル・バジエツホの詩が似ていたんだっていうことだね。

まちがいでなく具体例だね。で、非常に乱暴にいつてしまえば、具体例はそこまで緊張して読まんでよろしいよ。

というのも、抽象→具体の行き来は、抽象的説明をして、その後に具体的な説明をするという順番が多いんだ。

しかし、ここでは、いきなり具体例からいつているんだ。ちょっと確認して

ほしい。

⑩ 概念の共有が共生を可能にする。

⑪ 二人の詩人がいた。

⑫ 宮澤賢治。反戦的な詩。

⑬ セーサル・バジエツホ。敵兵を哀れむ詩。

⑭ バジエツホと宮澤賢治。

⑮ 言葉でしか言い表せないものを、国境を越えて共有できる。

⑪は⑩の具体例ではないよね。もちろんつながりはあるけれど、二人の詩人が、概念の共有が共生を可能にする、と述べたのではなく、この二人の詩人の引用を用いて、筆者が⑮の内容を主張しているんだよね。

つまり、①②③の具体例が先にあつて、④、⑤はこれを抽象化して説明しているという構造なわけだ。で、具体例が先に書かれても、筆者はこれについてどう述べようとしているのか読者には不明なんだから、たいていの場合、抽象的説明は平易で分かりやすいものになる。

だから、④、⑤で述べられていることが理解できれば、①②③の個別的な内容は別にどうでもよろしいというわけさ。別に宮澤賢治論でもセーサル・バジエツホ論でもないんだから。

ロニ、リノへしかしく

バジエツホも宮澤賢治も世に知られなかった。へしかしく二人は、お互いに知る由もなかった概念を共有していた。

脚問3もこの④の抽象的説明から取り出せば事足りるんだが……

脚問3 「同じ思い」とは、具体的にどのような思いか。

A 「死者への深い祈りと沈黙。」と答えたら申し訳ないが、2/7くらいかな。なぜかという点、「具体的」ではないから。特に、「深い祈りと沈黙」が解答としてまずい。

A たとえ敵であっても戦いによって失われる生命を悼む気持ちと、生命を奪う戦争がなくなることを祈念する気持ち。

こんな感じの解答になるのではないかと思う。先ほど抜き出した箇所を具体化して述べたものだということに気づくだろう。

ちなみに「沈黙」については読み取れないので、解答に反映していない。評論文においても、このように過剰に詩的な表現が混じることはあるが、非論理的な表現にとらわれてはいけないよ。現代文は、書いてあることを根拠に解答する力をつけるもんだから、想像に頼るのは道義に反すると心得よう。

⑮についても一つ。指示語というのがあるじゃない。これは十中八九、直前の内容を指しているんだが、その例外って何さ、ということがここに出ているパターンだ。

「その言葉」の「その」って何だろう。「死者への深い祈りと沈黙」ではないよね。じゃあ、⑭の内容全体、ってわけでもない。

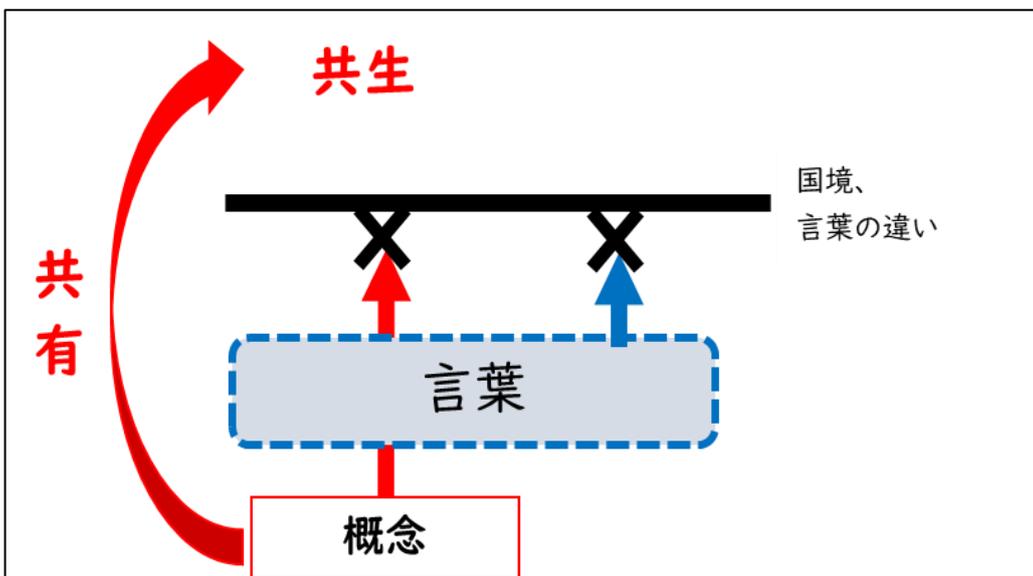
答えは、特に何も指していない、ということだね。「ある日のことでした」の「ある」と同じようなもんだ。機械的に指示語を処理していると、もしかしたら戸惑うことがあるかもしれない。ちなみに、同行の「そのように言葉でしか」の「そのように」は、たぶん直前の文の内容、つまり「その言葉によって、感じ、考え、受け止めるほかない言葉がある」ことだとは思いますが、前の「その言葉によって」の「その」と同様に、何も指さない「その」としても読んで無理はない。文章としては対応させている方がいいと思うが、まあ、どっちでもいいんじゃない。

いですかね。ここを出題されることはまずないだろう。

P11, L16 <でなくて>

国境を越えるのは、言葉<でなくて>概念である。

ここまで確認してきた内容が、はつきりと整理された感じだね。繰り返しながら、教科書に載っている水準の評論文では、こうしたAではなくBのパターンの主張が非常に多いよ。



さて、ここで終わってくればよかったのだが、最後に⑦がある。ここはさうとう難解だ。

概念は音楽に似ています。

なんなのそれ……。

気のせいじゃないですかねえ。で終わらせたいところだが、恐ろしいことに脚間になっているから、取り組まないわけにもいきまい。

まあ、世の中には、こういう筆者の感想に付き合わないといけない設問もあるということだ。

忘れてならないのが、これも繰り返しだが、解答の根拠は本文にある、ということ。反対に言えば、書いてないことは答えてはいけない、ということ。

じゃあ、なんて書いてあるのか読んでみよう。「それぞれの言葉という楽器によって、私たちにどう大切な概念を、誰に向かって、どう演奏するか」これで全てだ。

「二つ」と言われているから、次の「何より国境を」も含めたいところだが、どうもこれは音楽とは、全く関係なく、本文全体のまとめのようだ。ここは非常に間違いやすいと思う。

では要素を抜き出してみよう。

概念／音楽

言葉／楽器

ここまでではみんな理解できているだろう。概念を表現するのが言葉で、音楽を表現し演奏するのが楽器という関係だね。

さて、問題は次だ。ちょっと混沌とした表現になっているが、つまりはこういうことだろう。次の図をよく見て考えてほしい。

概念を ↓ 誰に向かって、) (

(音楽を (↓ 誰に向かって、どう演奏するか。

どうだろう。こう書くより分かりやすいかもしれない。

概念を誰に向かって、どう表現するか。

音楽を、誰に向かって、どう演奏するか。

まだ少々分かりにくいのが、どんな言葉を用いて、どんな表現をするによって、現れる姿は様々だということ、を述べているのだと思われる。まあ、一応読み取れるといえるね。

脚問4 「概念」のどのような点が「音楽」に似ているのか。二つ答えよ。

A・心のなかにしかないものが、言葉によってはじめて表現され、他者に伝えられる点。

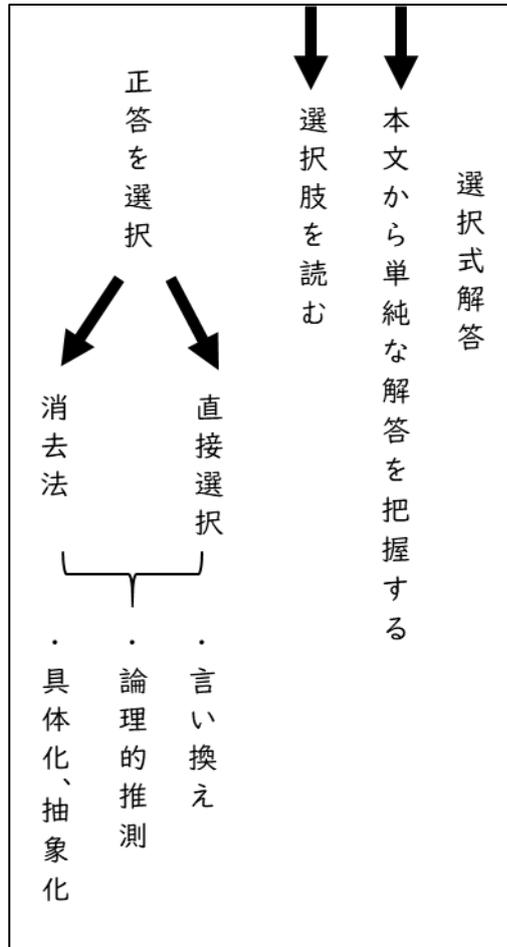
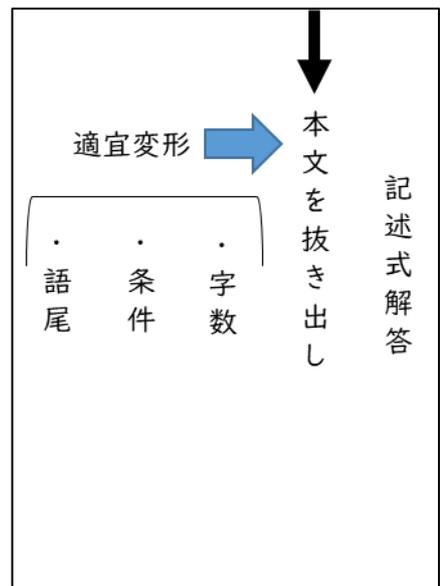
・どのような言葉を、どのように用いるかによって、さまざまな表現になる点。

いやこれは無理やてという声が聞こえてきそう。そうだと思う。無理だ。

はっきりいうが、これを記述式の問題で出題されると、まず満点をとれる学生はほとんどいない。がんばって部分点を取れ、ということになるだろう。

ただし、選択式の問題だと、そうではない。他の選択肢との兼ね合いで、選べないといけない。たぶん、多くの人が誤解していると思うが、実は選択式の間

題の方が、記述式よりも点を失いやすいんだ。



どちらが高度なことを要求されているのかは明白だ！

みんなここまで読めただろうか。なかなか難しかったと思う。

普段の授業でも似たようなことは言っているんだけど、どうしても個別の内容にとらわれすぎて、現代文の解答方法を理解しきることはできなかったと反省している。私が伝えたいことは、方法論に対する意識を持つようになると、現代文の能力はグンと高まるんだということだ。

ここでいう現代文の能力というのは、もちろん直接には入試問題をはじめとする得点の能力ということになるだろう。ただし、一般的に理解されていることに反し、論理的な読解力、すなわち社会で生きる上で不可欠な能力は、現代文の読解能力と異なるものではない。生きる上で極めて重要なことだ。

もう一点、強調しておきたいことがある。現代文はフィードバックで解くという人が多いんだけど、これは全くお勧めできない。確かにそれでハ割程度正解できる、かしい「人もいる。しかし、「問題との相性が……」とか、「取れる時は取れるんだけど……」という落とし穴にはまってしまっても多いんだ。厳しいことをいうけど、能力は、いつでも再現可能だからこそ重要なんだ。

みんな、勉強することが多くて大変だと思う。「現代文なんてやらなくていいよ」という声も聞こえてきそうだ。

しかし、本当にそうか？

本当は、最も合理的に得点を伸ばせるジャンルが現代文なんだよ。一番労少なく、劇的に得点が伸びる余地があるかもしれない。どうやったらできる？ 論理だ。論理は裏切らない。論理とはなんだ？ 文と文のつながりだ。文がどうつながっているのかを読むんだ。

ちょっと一緒にやってみないかねというメッセージを込めて、今回の授業を終わります。

今回の「国境を越える言葉」に関する問題も公開しておく(別ファイル)ので、必ず解いておくようにね。